

■正誤問題 (過去に出題された選択肢) 40 問

木工事に関する問題です。○×で回答して下さい。

1. 厚さ 12mm の板材は、長さ 25mm の釘で打ち付けた。
2. 大引の継手は、床束心から 150mm 程度持ち出した位置で、腰掛けあり継ぎ、釘 2 本打ちとした。
3. コンクリートに接する土台には、クレオソート油を 2 回塗った。
4. 敷居は、木表に溝を掘って取り付けた。
5. 下張り用床板の合板は、受材心で突き付け、乱に継ぎ、釘打ちとした。
6. 畳下地は、厚さ 12mm のコンクリート型枠用合板とし、根太間隔は 300mm とした。
7. コンクリートに打ち込む木れんがは、あり形のものとした。
8. 土間スラブに接するころばし根太の全面に、クレオソート油を塗り付けた。
9. 心持材の化粧柱には、見えがくれ面に背割りを行ったものを使用した。
10. 仕上材の縁甲板の継手の位置は、受材の心で通りよくそろえた。
11. 枠組壁工法の工事において、土台が基礎と接する面に防水紙を敷いた。
12. 厚さ 5.5mm の板材の留め付けに、長さ 22mm の釘を用いた。
13. 下張り用床板の合板は、受材心で突き付け、釘打ちとした。
14. 水掛かり箇所には、JAS(日本農林規格)による 2 類の普通合板を使用した。
15. 1 階の柱下部に筋かいが取り付く場合、その柱心から 400mm の位置に、アンカーボルトを埋め込んだ。
16. 床材には、厚さ 18mm のパーティクルボードを使用した。(枠組壁工法において)
17. 建方は、土台→壁枠組→頭つなぎ→小屋組→床枠組の順で行った。(枠組壁工法において)
18. 土台が基礎と接する面には、防水紙を敷いた。(枠組壁工法において)

19. 1 階の床組は、大引及び床束を用いて施工した。(枠組壁工法において)
20. 床根太相互の間隔を、50cm とした。(枠組壁工法において)
21. 畳床の下地は、厚さ 12mm のコンクリート型枠用合板とし、長さ 32mm の釘で打ち付けた。
22. 和室の畳床の根太の間隔は、450mm とし、継手位置を乱に配置した。
23. 厚さ 30mm、幅 90mm の木材を筋かいとして、長さ 50mm の太め鉄丸釘で柱と横架材に接合した。
24. 床張り用合板に、ホルムアルデヒド放散量が F☆☆☆☆ (平均値 0.3mg/l) の普通合板を使用した。
25. ホールダウン金物と六角ボルトを用いて、柱を布基礎に緊結した。
26. せっこうボード張り用の壁胴縁の取付間隔は、455mm とした。
27. 厚さ 5.5mm の板材の留付けには、長さ 22mm の釘を用いた。
28. 野縁の継手は、野縁受棧との交差箇所を避け、継手位置を乱にし、添え板を両面に当て、釘打ちとした。
29. 胴差と通し柱との仕口は、「傾ぎ大入れ短ほぞ差し」とし、金物で補強した。
30. 枠組壁工法における床材には、厚さ 15mm の構造用合板を使用した。
31. 壁の下地材として、厚さ 9mm の普通合板を用いたので、N25 の釘で打ち付けた。
32. 枠組壁工法において、床根太間隔が 65cm であったので、床材として厚さ 15mm の構造用合板を使用した。
33. 床張り用面材には、JIS による「F☆☆☆☆」のパーティクルボードを使用した。
34. せっこうラスボード張り用の壁胴縁の間隔は、450mm 程度とした。
35. 厚さ 12mm の板材の留付けには、長さ 32mm の釘を用いた。
36. 大引の継手は、その位置を床束心とし、腰掛けあり継ぎ、釘 2 本打ちとした。

37. 木材の防腐処理において、防腐剤は、環境に配慮した表面処理用防腐剤を使用し、2回塗りとした。
38. 窓、出入口等の水掛り部で、乾きにくい部分に使用する木材は、ひのき(心材)とした。
39. 厚さ 15mm の板材の留付けに、胴部径 2.15mm、長さ 38mm の釘を使用した。
40. 土台に使用する木材については、継伸しの都合上、やむを得ず短材を使用する必要があったので、その長さを 1m とした。



■正誤問題 解答編

1. 厚さ 12mm の板材は、長さ 25mm の釘で打ち付けた。

1. × **釘の長さは、打ち付ける板厚の 2.5 倍以上とします。**

2. 大引の継手は、床束心から 150mm 程度持ち出した位置で、腰掛けあり継ぎ、釘 2 本打ちとした。

2. ○

3. コンクリートに接する土台には、クレオソート油を 2 回塗った。

3. ○

4. 敷居は、木表に溝を掘って取り付けた。

4. ○

5. 下張り用床板の合板は、受材心で突き付け、乱に継ぎ、釘打ちとした。

5. ○

6. 畳下地は、厚さ 12mm のコンクリート型枠用合板とし、根太間隔は 300mm とした。

6. ○

7. コンクリートに打ち込む木れんがは、あり形のものとした。

7. ○

8. 土間スラブに接するころばし根太の全面に、クレオソート油を塗り付けた。

8. ○

9. 心持材の化粧柱には、見えがくれ面に背割りを行ったものを使用した。

9. ○

10. 仕上材の縁甲板の継手の位置は、受材の心で通りよくそろえた。

10. × **そろえるのではなく、乱に継ぐようにします。**

11. 枠組壁工法の工事において、土台が基礎と接する面に防水紙を敷いた。

11. ○

12. 厚さ 5.5mm の板材の留め付けに、長さ 22mm の釘を用いた。

12. ○ **釘の長さは打ち付ける板厚の 2.5～3 倍のものを、板厚 10mm 以下の場合は 4 倍を標準とします。**

13. 下張り用床板の合板は、受材心で突き付け、釘打ちとした。
13. ○
14. 水掛かり箇所には、JAS(日本農林規格)による2類の普通合板を使用した。
14. × **屋外や長時間湿潤状態な箇所で用いる場合は、1類を使用します。**
15. 1階の柱下部に筋かいが取り付く場合、その柱心から400mmの位置に、アンカーボルトを埋め込んだ。
15. × **柱下部に筋かいが取り付く場合、アンカーボルトは、柱心から通し柱においては、120mm内外、管柱においては200mm以内とします。**
16. 床材には、厚さ18mmのパーティクルボードを使用した。(枠組壁工法において)
16. ○
17. 建方は、土台→壁枠組→頭つなぎ→小屋組→床枠組の順で行った。(枠組壁工法において)
17. × **枠組壁工法の場合、土台の上に床枠組があり、その上に壁枠組があります。建方においては、一般に、床枠組が壁枠組に先行します。**
18. 土台が基礎と接する面には、防水紙を敷いた。(枠組壁工法において)
18. ○
19. 1階の床組は、大引及び床束を用いて施工した。(枠組壁工法において)
19. ○
20. 床根太相互の間隔を、50cmとした。(枠組壁工法において)
20. ○
21. 畳床の下地は、厚さ12mmのコンクリート型枠用合板とし、長さ32mmの釘で打ち付けた。
21. ○
22. 和室の畳床の根太の間隔は、450mmとし、継手位置を乱に配置した。
22. ○
23. 厚さ30mm、幅90mmの木材を筋かいとして、長さ50mmの太め鉄丸釘で柱と横架材に接合した。
23. × **釘の長さは打ち付ける板厚の2.5～3倍とします。**
24. 床張り用合板に、ホルムアルデヒド放散量がF☆☆☆☆(平均値0.3mg/l)の普通合板を使用した。
24. ○
25. ホールダウン金物と六角ボルトを用いて、柱を布基礎に緊結した。

25. ○

26. せっこうボード張り用の壁胴縁の取付間隔は、455mmとした。

26. × **せっこうボードの類を取付ける壁胴縁の取付間隔は、303mm とします。なお、せっこうラスボードその他の場合は、455mm とします。**

27. 厚さ 5.5mm の板材の留付けには、長さ 22mm の釘を用いた。

27. ○

28. 野縁の継手は、野縁受桟との交差箇所を避け、継手位置を乱にし、添え板を両面に当て、釘打ちとした。

28. ○

29. 胴差と通し柱との仕口は、「傾ぎ大入れ短ほぞ差し」とし、金物で補強した。

29. ○

30. 枠組壁工法における床材には、厚さ 15mm の構造用合板を使用した。

30. ○

31. 壁の下地材として、厚さ 9mm の普通合板を用いたので、N25 の釘で打ち付けた。

31. ○

32. 枠組壁工法において、床根太間隔が 65cm であったので、床材として厚さ 15mm の構造用合板を使用した。

32. ○

33. 床張り用面材には、JIS による「F☆☆☆☆」のパーティクルボードを使用した。

33. ○

34. せっこうラスボード張り用の壁胴縁の間隔は、450mm 程度とした。

34. ○

35. 厚さ 12mm の板材の留付けには、長さ 32mm の釘を用いた。

35. ○

36. 大引の継手は、その位置を床束心とし、腰掛けあり継ぎ、釘 2 本打ちとした。

36. × **大引きの継手は、束心から 150mm 程度持ち出し、腰掛けあり継ぎ、釘 2 本打ちとします。**

37. 木材の防腐処理において、防腐剤は、環境に配慮した表面処理用防腐剤を使用し、2 回塗りとした。

37. ○

38. 窓、出入口等の水掛り部で、乾きにくい部分に使用する木材は、ひのき(心材)とした。

38. ○

39. 厚さ 15mm の板材の留付けに、胴部径 2.15mm、長さ 38mm の釘を使用した。

39. ○

40. 土台に使用する木材については、継伸しの都合上、やむを得ず短材を使用する必要があったので、その長さを 1m とした。

40. ○

